今昔物語 第51話

正月行事 七草と、とんど

正月7日は、七草とも言い七種の菜っ葉（せり、なずな、ごぎょう、はこべ、ほとけのざ、すずな、すずしろ）を早朝、まな板に載せてたたき、粥に入れて食べる習慣がありました。雑煮にこの七種の菜っ葉を入れて食べる所もあります。古くから七草粥は、万病を除くものとして大切にされました。

とんどは小正月（1月15日）に行われる火祭りです。わらをとんがり屋根のように積み上げて、各家から出された松飾りやしめ縄を一緒に焼きました。火に体を当てると若返るとか、餅やだんごをその火で焼いて食べると体が丈夫になるとか、火に正月の書き初めをかざして、半紙が高く舞うと字が上手になるとか言われていました。火を神聖視する信仰のようなものがあったようです。

とんどのような行事は、一般的には左義長（さぎちょう）と呼ばれ、平安時代には既に始まっていました。

なお、松飾りやしめ縄を飾っている間を松の内といいます。

今昔物語 第52話

河内と大和を結ぶ道

古来、河内と大和を結ぶ道に、「直越（ただご）え」と呼ばれる道がありました。この道は平城京と浪速の宮を直線で結ぶ道で、古代の幹線道路でもありました。古事記には、「日下（くさか）の直越道」とあり、今の暗峠越えがそれと言われています。しかし、直越えのコースはいくつかあって、暗峠越えの他、辻子峠越え、善根寺越え、中垣内越えの総称だったのではないかとも言われています。

道は人間の往来だけではなく、牛馬による運搬に使われることから、峠の標高や険しさは使用頻度の一つの基準になったと考えられます。暗峠越えは標高455㍍で、大阪側が険しいのに比べて、中垣内越えは標高360㍍でなだらかなことを考えると、平城京と浪速の宮の往来に、中垣内越えは重要な位置を占めていたと思われます。